

1. センター長退任にあたって

上杉 正幸

法人化のスタートとともに、企画担当理事としてセンター長を勤めて参りましたが、この度退任するにあたり、センターの活動にご協力いただいた教職員の皆様へ一言御礼を申し上げます。

法人化の是非はさまざまですが、センターにとってはこれまでの制約を破り、新たな可能性を広げるチャンスでもありました。そのチャンスを生かす為に、二人の若い専任教員と一人しかいないベテラン事務官とで知恵を絞り、さまざまな試みにチャレンジしてきました。パイロット・プロジェクトとして始めた公募型公開講座や、香川県が行う生涯学習講座と大学の授業との連携を図った県民カレッジ、NPO法人との共同公開講座、資格取得を視野に入れた公開講座などがその試みです。特に公募型公開講座については、法人化後の新たな講座形態の試みとして文科省からも高い評価を受けました。

これらの事業をスタートさせ、1年目の実績を上げることができたのは、多くの教職員の皆様のご協力のおかげであり、センター長として心から御礼申し上げます。

今後当センターが、地域との結びつきをより一層深める事業を展開し、香川大学の個性化に貢献するセンターとなることを願っています。そしてそのために、多くの教職員の方々のご協力をお願いし、退任のあいさつとさせていただきます。

2. 公開講座紹介(第二回)～夏休み子ども向け企画～

2回目となる公開講座紹介は、7-8月の小中学校の夏休み期間中に開講された全5講座の子ども向け講座の中から、仲谷英夫工学部教授による「恐竜を復元しよう」(7月26～28日と8月8～10日の2回実施、いずれも連続3日間、13:00～15:00)と、植田和也教育学部助教授による「“ふしぎ”を考えるー科学手品、数を使ったトリック、マジックで「なぜ、どうして」の心をふくらまそうー」(7月23日・30日、全2日間、10:00～15:00)の2講座をご紹介します。

(1) 恐竜を復元しよう

<開講までの経緯>

本年5月、香川大学に大学博物館研究機構が発足したことは既にご存じのことと思います。大学は膨大な資料・標本を所蔵しており、同機構はそれらを整理し公開することを目的としています。

博物館活動は「収集」「保管」「展示」、そして「教育普及」が4本柱と考えられています。すなわち、資料・標本の公開に際し、単に展示するだけでなく、その資料・標本を効果的に用いた教育活動も重要な機能なのです。とはい

え、同機構の当面の業務は、学内に所蔵されている資料・標本のリストアップとなりますから、博物館機能のうちの教育普及に関しては生涯学習教育研究センターが協力することになりました。当センターにとっても、大学特有の資料・標本を用いた講座の実施は、大学博物館の教育普及機能の一翼を担うというだけでなく、他の生涯学習機関との差別化を図る上でも大いに意義のあることと考えております。

今回、その協力事業の第一歩として、仲谷先生が所有している恐竜プロバクトロサウルス一頭分のレブ



リカを活用した公開講座の開設を提案したところ、ご快諾頂きました。

おかげさまで4月11日(月)の受付開始からわずか1週間で定員が埋まってしまうという予想外の反響を得ることができました。そこで急遽仲谷先生にはご無理をお願いして、同じ内容の講座を別日程でもう一回設定して頂くという異例の事態も生じました。

<講座風景>

全3日間の講座は、はじめの2日間で人と恐竜の骨格の違いや化石についてビデオ視聴や実物標本を用いながら学び、最終日にプロバクトロサウルスのレプリカの組み立てを行いました。

受講した子どもたちの反応も上々で、アンケートには「化石や骨一つでいろんなことが分かるんだなあ」「骨の組み立てが楽しかった」などの声が寄せられていました。

また、同講座の様子は8月10日のNHK「情報ワイド香川」でも紹介されました。

今回のような公開講座は、他ではできない、大学ならではの企画と言えるでしょう。

(2) “ふしぎ”を考えるー科学手品、数を使ったトリック、マジックで「なぜ、どうして」の心をふくらませようー

<開講までの経緯>

植田和也助教授は香川県教育委員会との交流人事で本学教育学部に勤務され、今年で3年目を迎えています。学内外で意欲的に活動され、さまざまな地域における講座を担当されたりと、社会貢献にも熱心に取り組まれている先生です。

今回の公開講座のベースは「マジック」と「科学実験」にあります。そのきっかけは、植田先生が平成9年に日米教員海外派遣でオレゴン州に行かれることになり、言葉を越えたコミュニケーションツールとしての手品と向き合うことにありました。この手品が実は科学実験にも通じ、かつ人間関係づくりで大いに役立つということを実感し、この世界に深く関わるようになり、子どもたちに関わることの喜びを知ってもらうための学校現場での実践活動はもとより、昨年5月には香川大学の手品サークル「メルシー笑クラブ」も立ち上げ、現在も精力的に活動されています。

一方、昨今の教育問題として「学力低下」があげられており、特に「学ぼうとする力」の衰えが深刻さを増しています。今回の公開講座は、子どもたちに「なぜ、どうして？」の気持ちを芽生えさせ、「考えることの楽しさ・愉しさ」を伝えたいという植田先生の強い気持ちで企画されました。実は、マジックや科学実験の向こうにある、私たちが置き去りにしてきたものを思い起こさせるメッセージを込められたのかも知れません。



<講座風景>

講座では、植田先生が次から次へと繰り出す手品・トリックに子どもたちが熱心に取り組んでいる姿が印象的でした。また、初回には隆祥産業にインターンシップで訪れているドイツ人留学生スヴェン・コッツさんの飛び入り参加というハプニングがあったのですが、子どもたちは早速学んだばかりの“数のマジック”を披露してくれました。

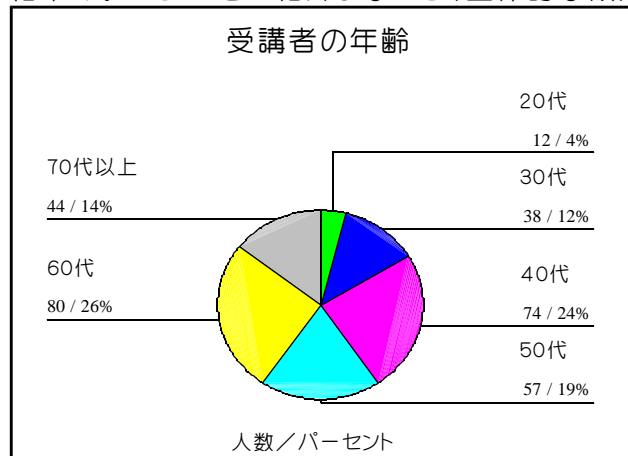
3. “公開講座”考(第一回)

本号から、データと理論の両面から公開講座について考えることとします。

(1) アンケート結果から見る公開講座(その1)

公開講座終了に当たっては、受講生の方々にアンケートの記入をお願いしています。昨年度は311名の方から提出頂きました(修了証書授与者435名)。その結果について本号から数回に渡ってご紹介しながら

ら、公開講座の現状と課題について考えたいと思います。本号ではまず昨年度のアンケートの単純集計結果のいくつかをご紹介しますながら、全体的な傾向を見てみることにします。



まず、公開講座受講者の属性はどうなっているのでしょうか。

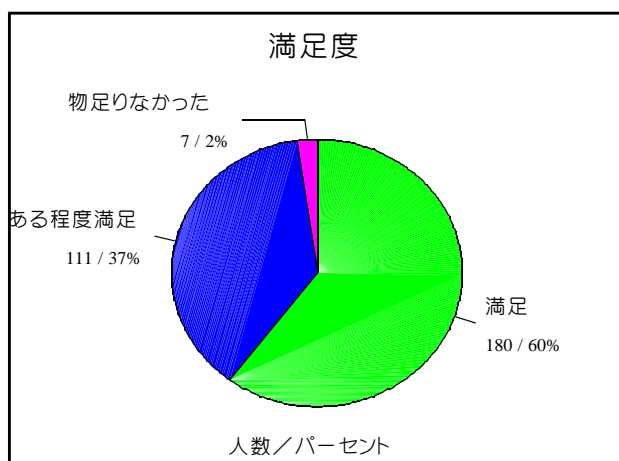
男性と女性の比率は、男性が93名(30%)、女性が212名(70%)と女性の受講者が多くなっています。

年齢別に見ると、左の円グラフの通り、最多年齢層が60代の26%、続いて40代(24%)、50代(19%)、70代以上(14%)となっており、40代以上で8割以上を占めていることがわかります。公開講座は現状では中高年層の支持を受けている反面、20代30代の若年層にとって魅力のある講座を考えることが今後の課題と言えましょう。(なお、昨年度までのアンケートでは10代以下の項目は設定していませんでした。)

次に、受講回数を見ると、公開講座をはじめて受講された方が112名(37%)、二回目の方が43名(14%)、そして三回目以上の方が150名(49%)となっています。一度参加した方が、二度、三度と繰り返し受講する、いわゆるリピーターが3分の2弱を占めていることがわかります。リピーター＝固定客が一定程度以上いるということは、毎年ある程度の受講生が見込めるといえるというメリットがあります。とはいえ、新しい受講者層を開拓していく努力も必要でしょう。

ところで、参加した受講生の満足度はどうでしょうか。グラフから分かるとおり、6割の方が「満足した」、4割弱の方が「ある程度満足した」と答えて下さっており、満足度は高いと言えます。ただ、「満足」と「ある程度満足」の違いはどうして生じるのでしょうか。その差が気になるところでもあります。

クロス集計結果や、自由記入欄に寄せられた声などについては次号以降でご紹介します。(文責:山本珠美)



(2) 成人教育理論の視点から公開講座を考える(その1)

公開講座を担当下さった先生方の中には、成人学習者の学習意欲に大きな可能性を感じたり、持論を展開する学習者に戸惑いを覚えたり、さまざまな経験をおもちのことと思います。数多くの成人学習者に触れてきた筆者の経験も生かしながら、今後、シリーズで成人教育について取り上げていきます。まずは、受講生の声から拾いあげたものを紹介します。

公開講座の受講生の多くは、大学での学びに大きな期待をもって参加します。地域で実施される講座とは異なり、有料講座ですからとても熱心な受講態度です。アカデミズムに触れることはもちろん、先生方のパーソナリティに惹かれてリピーターとなる受講生も少なくありません。伝統的學生とは明らかに異なる知との出会いを求めています。

その成人学習者との関わりの中で分かってきたことがあります。今回は2点紹介します。ひとつは、基本的なことになりますが、担当講師の「声を届ける」ことへの関心です。充実した内容の講座であっても、その声が聞き取りにくいとすれば受講生のもとに届きません。声の大きさだけであれば備え付けのマイクの音量調整でいけますが、声は発するだけでは必ずしも十分ではなく、**ひとりひとりに届けようとする意識と姿勢**が必要なようです。もうひとつは、「十分な資料」の準備です。公開講座の受講生はとても勉強熱心ですから、大学以外の場所でも多くの学習経験をもっています。いくら話術に長けていても、配付資料が受講生の学習を深化させるものになっていないと、トータルの満足度は下がってしまうようです。**知的好奇心を刺激する魅力的な資料**は、受講生の自己学習への意欲を喚起すると考えていただくといいでしょう。ちょっとしたことですが、参考になれば幸いです。

次回からは成人教育学者M. ノールズのアンドラゴジー論をご紹介します。(文責:清國祐二)

4. 平成17年度高松市地区公民館職員研修会

高松市地区公民館職員研修会は当センターの主催事業の一つで、公民館職員の資質向上のため、ひいては地域社会における生涯学習の活性化のために、平成15年度に開始されました。

自己点検ワークシートを使って自館を見直す機会をもちたり(6月)、日々の社会教育活動の中で収集された情報の扱いについて、著作権や個人情報保護との関係について考える(8月)など、演習形式で進めています。

<平成17年度研修プログラム>

日 程	テ ー マ	担 当
5/20(金)	地域づくりと地域教育計画	清國祐二
6/21(火)	施設経営のための施設評価のあり方	山本珠美
7/21(木)	事例から見る行政機関の機能と役割	山本珠美
8/19(金)	情報収集の手法と情報提供・相談活動	山本珠美
9/21(水)	助成や委託を得るための企画書作成の技法	清國祐二
10/21(金)	事例から見る地域づくりの成果と課題	清國祐二

5. 『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』第10号のお知らせ

毎年発行している『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』は、生涯学習を研究する本学教員、センターが主催あるいは協力する講座等を担当した本学教員であれば、どなたでも投稿することができます。

最新号(第10号)の内容は以下のとおりです。ご関心のある方はセンター事務室までお問い合わせ下さい。なお、次号(第11号)の原稿募集につきましては、本年12月中旬頃に正式に通知いたします。

<研究論文>

大学生のボランティア学習の評価に関する実証的研究	清國祐二
高松市及び周辺市町の生涯学習機会に関する調査(II)	清國祐二
ドイツ教育研究省‘Futur’リードビジョン 「明日の学びの世界へのアクセスを開かれたものとするために」～解説付き～	山本珠美
2004年度香川大学萌芽研究 「市民活動を支える生涯学習教育研究センターの役割に関する研究」報告	山本珠美・清國祐二

<公開講座>

情念の問題:人間論的考察	
アーレントとソクラテス	建島正秋
ルターと親鸞における苦難と信仰ー宗教的パトスの一類型ー	中谷博幸
共感と道徳	斉藤和也

センター雑感

健康診断で一番気になることと言えば、やはり体重。。。などと言っていたのは、私に限って健康診断に引っかかるわけではない!と高をくくっていたから。要精密検査と言われ、病院に出向き、どんな結果が出るのか不安な一時期を過ごしました。結果的に何の異常も見つからず大事には至りませんでした。親しい人に「職場で健康に気遣ってもらえるのは有り難いこと」と言われ、健康診断の有り難みを感じました。

芸術の秋、スポーツの秋、読書の秋、はたまた食欲の秋(!)、秋には楽しみがたくさんあります。皆様もどうぞ健康には十分留意しつつ、秋を堪能して下さい。(山本)